

常盤台バプテスト教会 成人科

「聖書日課と分かち合い」 2月号



第45課 準備のための聖書日課

1月30日(月) イザヤ書56:6~8 すべての人の祈りの家

6 また、主のもとに集って来た異邦人が
主に仕え、主の名を愛し、その僕となり
安息日を守り、それを汚すことなく
わたしの契約を固く守るなら
7 わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き
わたしの祈りの家の喜びの祝いに
連なることを許す。
彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら
わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。
わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。
8 追い散らされたイスラエルを集める方
主なる神は言われる
既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。

エルサレムには「ヤド・ヴァシエム」という国立記念館があります。第二次世界大戦中にナチスドイツによって約600万人以上のユダヤ人が虐殺されました。この悲劇を歴史の中で教訓として次世代に伝えることを目的として建設されました。ユダヤ人も異邦人も主に仕え、愛し、僕となるならばわたしの家に招かれ永遠の名が与えられる、とイザヤ書56章のみ言葉がこの記念館設立の基となっています。

1月31日(火) エレミヤ7:1~11 強盗の巣窟

1 主からエレミヤに臨んだ言葉。
2 主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。
「主を礼拝するために、神殿の門に入って行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。3 イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。4 主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。5-6 この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。7 そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住まわせる。8 しかし見よ、お前たちはこのむなしい言葉に依り頼んでいるが、それは救う力を持たない。9 盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった異教の神々に従いながら、10 わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。11 わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。

ヒゼキアの死後、息子マナセは父の行った良い政治と信仰をあっという間にバアル信仰へと戻してしまいます。またマナセの息子アモンもマナセ同様悪い王でした。しかしヨシヤ王は良い治政をし、神を信じる信仰を大切にします。このように王によって信仰する神がころころ変わったので、ユダヤの人々は表面的には神を信じると告白しても内面的には不信仰だったのかもしれませんが。エレミヤは神との真の関係を復活させるべく語りますが、エレミヤの言葉を聞く者などほとんどいなかったのです。祈りの家であるべき神殿が強盗のアジトへと落ちぶれてしまったことを嘆いています。

2月1日 (水) ルカ16：13 神と富とに仕えられない

どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

私たちは神の家の管理人であり、私たちの富は神から預かっているものです。お金や能力は自分が弱く小さな存在であるということを忘れさせます。お金は悪いものではありませんがお金に頼りすぎ貪欲になることには注意が必要です。私たちの日々の生活を守り、与えてくださるのは神さまです。感謝をもってこの地上の富を神さまのみわざのために用いていただきましょう。

2月2日 (木) ルカ21：5～6 神殿崩壊の予告

5ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。6「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

ヘロデが建てた豪華絢爛な神殿がありました。神によってではなく王の見栄によって建てられた神殿は、人々の霊の目を塞ぎ信仰を墮落させます。「なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物」(マルコ13：1)と弟子たちでさえ、目に見えるものに価値を持ち、心を惹かれています。目に見えるすべてのものは「過ぎ去るもの」「滅びゆくもの」です。本当に大切なものは何か、目には見えないけれど大切なものを見失わないように霊の目をパッチリ開けておきましょう。

2月3日 (金) ルカ21：20～24 エルサレム滅亡の予告

20「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。21そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。22書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。23それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。24人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

ユダヤの民は、神に背いて離れ、神の言葉に聞き従いませんでした。その報いとしてエルサレムは崩壊すると預言されていましたが、それが実現すると言っています。では神の裁きとも言えるこのような状況のとき、私たちはどうしたらよいのでしょうか。罪の世の過ぎゆくもの、神の裁きを受けるものと一緒に滅ぶことのないように、「逃げよ」と主は言われます。神の裁きを逃れて、祝福された救いの道へと入れますように主に従い、祈りつつ歩みたいと願います。

2月4日(土) ルカ13:31~35 エルサレムのために嘆く

31 ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」 32 イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。 33 だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。 34 エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。 35 見よ、お前たちの家は見捨てられる。言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

イエスさまの数々のみわざ・奇跡・憐れみ・メッセージを思い起こしてみましょう。それはめんどりがひなを羽の下に集めるような働きでした。しかしユダヤの人々は応じなかったとあります。イエスさまは彼らのことを嘆かれますが、主の再臨の条件が何であるかを詩編から引用して重要な預言をされました。今日も明日もその次の日も、主の再臨の日を共に待ち望み、祈りの家に共に集い、共に祈りを捧げていきましょう。

2月5日(日) ルカ19:41~48 イエスの涙、イエスの怒り

41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、 42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。 43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、 44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

45 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、 46 彼らに言われた。「こう書いてある。

『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』

ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」

47 毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、 48 どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。

エルサレムの都が見えたとき、イエスさまは涙を流されました。これはほんの少し涙をこぼした、というのではなく大声で泣いたのです。それは人々が平和につながる道をわきまえていないため、戦争が起き、攻め込まれて、徹底的に破壊されるからです。私たちが平和につながる道をわきまえず、神の訪れのときを知らずとしないとき、イエスさまはお怒りになり悲しまれるのです。

(担当：宇佐美 典子)

第45課 ショートメッセージ 「イエスの涙、イエスの怒り」

聖書箇所： ルカ 19：41－48

暗唱聖句： わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。（イザヤ56：7）

今週の聖書教育誌の週題は「イエスの涙、イエスの怒り」です。

今週の学びでは「エルサレム入城」と「宮清め」での出来事の中からイエスさまが流された涙と、怒りを私たちがどのように受け止めていけば良いのかを分かち合って参りましょう。

今年は2月22日(水曜)から4月8日(土曜)までの40日間(主日を除く)が受難節・レントを覚える期間となります。イースター(復活祭)は4月9日です。イースターまでの最後の1週間が受難週となります。このレントと受難週の46日の間、ルカ福音書を辿りながらイエスさまの十字架への道行きと受難を覚えて過ごしたいと思います。今週の学びはその備え・準備としてであると示されました。

さて、私たちにとって涙と怒りの感情は自分の内にある感情の起伏の表現行動です。悲しい時、悔しい時、寂しい時、あるいは嬉しい時に泣くことで感情を穏やかにします。怒りは自分の身を守るために備わっている自然な感情です。生命の危険から守るため、大切な価値観や立場が傷つけられたり、自分の思い通りにならないときに怒ることで防衛本能が働きます。私たちの日常生活のなかでは度々にあることではないでしょうか。

イエスさまの涙と怒りは私たちと同じ感情の発露なのでしょう。何故、涙を流され、お怒りになられたのでしょうか。レントを迎える前にこの週題が与えられたことに大きな意味があると思われました。

イエスさまはご自分のためには泣く事も、怒ることもなさいません。父なる神が涙されるときに泣き、父なる神が怒っておられる時にお怒りになるのです。

19:41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、

愛する神の都・エルサレムが背信の罪のためにローマによって滅亡する日を思って涙されました。史実として紀元70年にエルサレムは徹底的に破壊されたのです。

19:42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。」

私たち罪ある者には心に本当の平安も平和ありません。罪を悔い改め、神との真の和解が実現したときに「キリストにある平和」が与えられるのです。そこには涙も怒りもないことでしょう。

イエスさまが涙された場面が新約聖書には三度、記されています。愛する友ラザロの死の時、ヘブル書で記されているすべての人々の救いのために祈り願われた時と今週の聖書箇所です。

ヘブル 7:5 「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」

イエスさまはご自分の望みではなく、父なる神の御心が行われるように祈ってくださいました。すべての人の救いを願うキリストの愛が涙となって、イエスの涙となって溢れ出たのです。その愛は今を生きる私たちにも届いているのです。

19:45～46 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し始めて、彼らに言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」

この神殿の異邦人の庭と呼ばれた場所で両替商や自分の罪の身代わり(贖罪)として献げる動物を扱う神殿商人が巡礼者を相手に商いをしていました。当時のユダヤの地方で扱われていた通貨はローマ・ギリシャ・エジプト等で流通する色んな種類の通貨でした。しかし、当時の成人男性は神殿で「聖所の貨幣」であるシュケルで年・半シュケル(二日分の賃金相当)を神殿税として納める定めとなっており、このために両替商が必要とされたのです。彼らは両替で法外な要求をして利益をむさぼっていました。

また、犠牲とする動物は傷ひとつないものであることを求められましたので神殿内の神殿商人から買わざるを得なかったのです。当然、これらも法外な値で売られ、その不当な利益は最終的には大祭司一族のもとに集まったのです。

彼らは神殿での商売で巡礼者を食物にし、神の家で礼拝する場所が神殿商人や宗教指導者たちが搾取る手段の場に成り下がり果てていたのです。まさに「礼拝の場所」を「強盗の巣」としていたとイエスさまは強く激しい怒りをあらわにされたのです。

イザヤ 56:7 わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

異邦人の庭は異邦人であれ誰でも礼拝できる祈りの場所なのです。神に招かれた人々が礼拝できないような環境・有様に怒られ、取り除こうとされたのです。それは父なる神の怒りでもあるのです。

現代においても神は礼拝をささげようとする私たちを喜んで招いてくださいます。しかし、礼拝する場が神の目からふさわしいものではなかったら、それは神に対する罪であり、真の礼拝を妨げるものであり、イエスさまの怒り、神の怒りとなるのです。

礼拝の場にあっても、そのことに気づけないのが罪深い私たちです。聖霊により心に示された罪を告白し赦しを乞い願うことの大切さを覚えます。そのような私たちであるにもかかわらずイエス・キリストは十字架の贖いと復活をとおして神の赦しと救いに与ることができるように執り成してくださるのです。「イエスの涙、イエスの怒り」は私たちのためのものであったのです。ここに愛があります。

イエスさまの愛を受けて、神を恐れ、悔い改めて従う信仰生活を送ることができますように日々、自分自身と向き合っていきたいと願わされました。

● 分かち合い

- ・ 自分自身が祈りの家となるために、心がけておられることを分かち合ってみましょう。
- ・ 私たちの教会が祈りの家となるために、あなたが心がけたいと願うことは何ですか。

【聖所のシュケル】

出エジプト記 30:11～13

主はモーセに仰せになった。

あなたがイスラエルの人々の人口を調査して、彼らを登録させるとき、登録に際して、各自は命の代償を主に支払わねばならない。登録することによって彼らに災いがふりかからぬためである。登録が済んだ者はすべて、聖所のシュケルで銀半シュケルを主への献納物として支払う。一シュケルは二十ゲラに当たる。

(担当：郷 秀男)

第46課 準備のための聖書日課

2月6日(月) ルカ8:4~15 種を蒔く人のたとえ

4大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がそばに来たので、イエスはたとえを用いてお話しになった。5「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。7ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。8また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

9弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。10イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは、

『彼らが見ても見えず、

聞いても理解できない』

ようになるためである。」

11「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉である。12道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。

13石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。14そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。15

良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。」

「道端のもの」「石地のもの」「藪の中のもの」、全てに当てはまってしまうようで怖いです。

全ての御言葉が私達の心の中で実を結びますように。当時の方々には解き明かしを聞かせて貰えなかったことを思うと、聖書を通して知る事が出来る私たちは感謝ですね。

2月7日(火) ルカ8:19~21 聞いて行う人こそが

19さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のために近づくことができなかった。20そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。

21するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」とお答えになった。

「いや、実の母と兄弟の方のことです。」と言ってしまいそうになる箇所です。12歳のイエス様が過越の祭りのあと、見当たらずに探し回り、問いただした時のお言葉、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」(ルカ 2:49)の箇所と似ています。イエスさまにとっては神の家族の方が「実の家族」という感覚であったからこそのお言葉ですね。

2月8日(水) ルカ10:21~24 あなたが、今聞いていることこそ

21そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。22すべてのことは、父からわたしに任せられ

ています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」²³それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。²⁴ 言うておくと、多くの預言者や王たちは、あなたがたがしているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

多くの預言者にでさえ見聞き出来なかった。預言者にもそれぞれに与えられた働きに必要な御言葉は与えられていましたが、まだ全てのことを与える時ではなかったと想像できます。人としてのイエスさまにお会いできたのは 2000 年前の当時の方々のみ。弟子たちはイエスさまと布教活動や寝食を共にされていたことを思うと羨ましい限りですが、イエスさまのことを世界に伝えていくという大きな働きに用いられるために必要なものとして与えられていました。

2月9日(木) ルカ12:49~53 分裂さえもたらす

49「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。⁵⁰ しかし、わたしには受けねばならない洗バプテスマ礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。⁵¹ あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくと、むしろ分裂だ。⁵² 今から後、一つの家一家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。

⁵³ 父は子と、子は父と、
母は娘と、娘は母と、
しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、
対立して分かれる。」

「わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくと、むしろ分裂だ。」の所だけ読むと「えっ!」となってしまいます。でも、実際にイエスさまを救い主であるかを認めるかどうかで当時のユダヤ教信者の人達はそれぞれに対立し、分裂していきました。その時は平和ではなくむしろ分裂をもたらししていたと言えるのではないのでしょうか?

2月10日(金) ローマ10:14~21 聞くことによって始まる

14ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。¹⁵ 遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。¹⁶ しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っています。¹⁷ 実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。¹⁸ それでは、尋ねよう。彼らは聞いたことがなかったのだろうか。もちろん聞いたのです。

「その声は全地に響き渡り、
その言葉は世界の果てにまで及ぶ」

のです。¹⁹ それでは、尋ねよう。イスラエルは分からなかったのだろうか。このことについては、まずモーセが、

「わたしは、わたしの民でない者のことで
あなたがたにねたみを起こさせ、
愚かな民のことであなたがたを怒らせよう」
とっています。20 イザヤも大胆に、

「わたしは、
わたしを探さなかった者たちに見いだされ、
わたしを尋ねなかった者たちに自分を現した」

とっています。21 しかし、イスラエルについては、「わたしは、不従順で反抗する民に、一日中手を差し伸べた」とっています。

「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」、「その声は全地に響き渡り、その言葉は世界の果てにまで及ぶ」。今現在、聖書が世界のベストセラーとなり、インターネットを通して様々なメッセージをいつでも聞くことができます。キリストの言葉は世界の果てにまで及んでおり、一日中手は差し伸べられている状況とすることができます。それでも「宣べ伝える人」がいなければ、伝わっていかないのではないのでしょうか。

2月11日(土) マルコ4：21～25 何を聞いているかに注意を

21 また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。22 隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。23 聞く耳のある者は聞きなさい。」

24 また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量る秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。25 持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

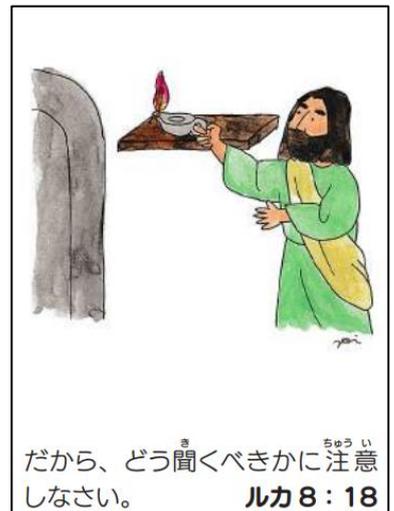
御言葉（ともし火）を聞いても、日常生活の下に置いて隠してしまうと何の効果もない。しかし、御言葉を私たちの生活の上に掲げていくとき、御言葉は私たちを慰め、励まし、支えて下さる。また、今まで見えてなかったものが見えてくる（気づきが与えられる）のです。

2月12日(日) ルカ8：16～18 ともし火をともし

16 「ともし火をともし、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。17 隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない。18 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」

「だからどう聞くべきかに注意しなさい」。自分があって御言葉を聞くのではなく、むしろ「御言葉に聞く」。御言葉に自分が導かれるように聞く。自分の考えの補強のために都合の良い御言葉を選んで受け入れらるのではなく、御言葉を自分の中に受け入れて、自分の考えを変えていく（変えさせてもらう）。表現が難しいですが、御言葉に対する態度（姿勢）のことを言っているのではないのでしょうか。

(担当：栗山 義亜)



第46課 ショートメッセージ「ともし火をともしして」

聖書箇所：ルカ8：16－18

暗唱聖句：だから、どう聞くべきかに注意しなさい。（ルカ8：18）

2月も半ばに差し掛かっていますが、季節はまだまだ冬。寒くて暗い夜には、光が恋しくなります。家に帰ればまず初めにするのは、電気を点けること。部屋が明るくなってようやく、帰って来たと実感します。新約聖書の時代は、オリーブ油を用いたランプを灯りとしていたそうで、それは蛍光灯と比べれば小さな光だったことでしょう。それでも当時の人にとっては、視覚的に、そして心理的に大切な意味を持っていたことが想像できます。

今週の「ともし火のたとえ」は、「種を蒔く人のたとえ」から連続して語られたみ言葉です。「種を蒔く人」では、御言葉を聞いた後の人間が4つに分類されています。

ルカ8：12-15

道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。

このたとえを聞いて、「自分は完べきに4つ目の種のように生きている」と思える方は、そう多くはないでしょう。どれほど長く信仰生活を送っていても、いやむしろ長く送っている方ほど、3つ目までの種のようになった・なりかけたことを多く思い起こされるかもしれません。

これらが語られた当時、イエスさまの評判は急速に広まり、たくさんの方が付き従うようになりました。8章の冒頭にはマグダラのマリアを始め、多くの婦人たちが奉仕していたことも書かれています。イエスさまの御言葉を「聞く」人の数も増えていったことでしょう。だからこそ、「聞いた後」に何が大切かを教えてくださっているのです。

今週の「ともし火のたとえ」においても、ともし火＝御言葉をいただいた上でどうするか、が問われています。せっかくの灯りを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりすることは、ともし火の意味を打ち消しており、イエスさまも「そんな人はいない」と断言されているくらいの頓珍漢な行為です。

しかし、御言葉を聞いた後の行為としては、絶対に無いとは言えないかもしれません。素晴らしい言葉なことは分かりつつ、その眩しさから目をそむけていたい・・・ちょっと見えないように隠しておきたい・・・。御言葉を守り切れない自分の弱さを思うあまり、御言葉自体を自分から遠ざけ、切り離れたくなる誘惑が、常に私たちには付きまといまいます。しかし、そのように御言葉を自分の奥底にしまい込んでいる限り、周りの人にその光が届くことは当然あり得ません。

今日の箇所と、並行箇所であるマタイ 4：21-25 の大きな違いは、ともし火を燭台の上に置く理由として「入ってくる人に光が見えるように」ということが書かれているか否か、です。今日の箇所においては、御言葉を聞き、正しく従っていくなれば、その姿が新たなともし火となる、と教えられているように思います。自分のことで精いっぱいになりがちな私たちですが、目指すべきところはここにあるのです！

・・・と書くと少々ハードルが高くも感じられますが、続く 17 節が勇気を与えてくれます。隠れているもの、秘められたものは必ず公になる。「隠し事はできないね」という話ではなく、御言葉の持つ力を人間が完全に覆い、隠しきることなどできないのです。それこそ、ランプの火を人間の手で覆ってみても必ず隙間から光が漏れるでしょうし、そのうち火の熱さに手が負けるはずです。そのように力強い御言葉だからこそ、私たちからは「燭台に置く」ことさえすれば、後はその光が自ずと周りの人を導いてくれるのです。小さなランプを燭台に置く。人の目には小さな行動であっても、その一歩を主は喜んでくださり、幾重にも祝福してくださいませ。

そのことは、18 節にも表されています。私たちが御言葉を聞くだけでなく、正しく従う人生を歩むならば、一人ひとりに与えられた御言葉は、信仰は、何倍もの実りとなります。しかし聞いただけで終われば、やがて御言葉を忘れてしまうことでしょう。「どう聞くべきか注意しなさい」という言葉には、自分を一時的に慰めたり励ましたりするために御言葉を聞くのではなく、永遠に従うべき指針として聞きなさい。そしてまだ聞いたことがない人に伝えていく思いを持って聞きなさい。そのように示されていると感じました。主にある家族として互いに励まし合いながら、御言葉を聞き従って参りましょう。

● 分かち合い

- ・ 皆さんにとって、ともし火を「燭台に置く」のと同じくらい気軽にできる伝道とはどのようなものでしょうか。
- ・ 皆さんが信仰を持ち、育んでいく中で、周りの方からの「光」によって道を照らされたことはありますか。

(担当：郷 健人)

第47課 準備のための聖書日課

2月13日(月) 使徒3:1~10 私には金銀はないが

1ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。2すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。3彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとすることを見て、施しを乞うた。4ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、6ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」7そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、8躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。9民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。10彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

金銀を貰えると思って二人をじっと見つめ続けていると、ペトロは自分たちが今生きているもの生かされているもの、この男の人をも生かす最高のものを与えたいと願った。「私には・・・、ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」生まれながら足の不自由な人の驚きと喜び、讃美は想像を絶します。主の憐れみを生んだこの出来事に、いつも見つめていて下さる主の愛の瞳に焦点を合わせることの大切さを学びます。

2月14日(火) 使徒4:32~37 わかちあって生きる

32信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。33使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。34信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、35使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。36たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバー―「慰めの子」という意味―と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、37持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

ペンテコステ後の初代教会では、「一人として持ち物を自分のものだと言うものはなく共有していた。」故に「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。」ですが、後に大飢饉が起こり貧困も経験します。(11:28)コロナ禍で貧しさも広がり、カルトが蔓延する現代ですが、主に与えられた賜物(富だけでなく、癒し、教える、祈り、導く、音楽、寄り添い、傾聴など)を分かち合い助け合って、主を賛美することは世の人々からも好意を持たれ良い証になって行くことを信じます。

2月15日(水) 一コリント16:1~4 エルサレム教会への募金

1聖なる者たちのための募金については、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも実行しなさい。2わたしがそちらに着いてから初めて募金が行われることのないように、週の初めの日にはいつも、各自収入に応じて、幾らかずつでも手もとに取って置きなさい。3そちらに着

いたら、あなたがたから承認された人たちに手紙を持たせて、その贈り物を届けにエルサレムに行かせましょう。 4 わたしも行く方がよければ、その人たちはわたしと一緒に行くことになるでしょう。

この募金は、様々な理由によって経済的困難に直面しているエルサレム教会にとって、異邦人教会の真実性を知る実際的な印となって、両教会の連携を強める働きとなります。募金(献金)は十分な理解と準備を持って週の初めの日に用意すると言っています。富める者、余裕のある者に偏らず、神様と個人の生きた関係で各自収入に応じて、何よりも主なる神さまの恵みに主体的に自由に応答する特権ですね。

2月16日(木) フィリピ4：10～20 贈り物への感謝

10 さて、あなたがたがわたしへの心遣いを、ついにまた表してくれたことを、わたしは主において非常に喜びました。今までは思いはあっても、それを表す機会がなかったのでしょうか。 11 物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。 12 貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。 13 わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。 14 それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました。

15 フィリピの人たち、あなたがたも知っているとおりに、わたしが福音の宣教の初めにマケドニア州を出たとき、もののやり取りでわたしの働きに参加した教会はあなたがたのほかに一つもありませんでした。 16 また、テサロニケにいたときにも、あなたがたはわたしの窮乏を救おうとして、何度も物を送ってくれました。 17 贈り物を当てにして言うわけではありません。むしろ、あなたがたの益となる豊かな実を望んでいるのです。 18 わたしはあらゆるものを受けており、豊かになっています。そちらからの贈り物をエパフロディトから受け取って満ち足りています。それは香ばしい香りであり、神が喜んで受けてくださるいけにえです。 19 わたしの神は、御自分の栄光の富に応じて、キリスト・イエスによって、あなたがたに必要なものをすべて満たしてくださいませ。 20 わたしたちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

パウロの窮乏を救おうとして(おそらく主から押し出されて)何度も贈り物をしたフィリピの人々、この贈り物には宣教拡大の切望とお祈りがこもっていて、非常に励まされ喜んでいました。そして神さまは送った側の必要も全て満たして下さると断言されます。私たちの献金や小さな贈り物、心遣いも神さまによっていく倍にも祝福されて、用いられますように・・・。

2月17日(金) ルカ12：4～7 一羽の雀さえ

4 「友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。 5 だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言うておくが、この方を恐れなさい。 6 五羽の雀が二アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。 7 それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

1 羽の雀さえ神さまに覚えられている。あなたがたの髪の毛一本ですら数えられている。と励まして下さる神さま。

私たちは主の御許に身を寄せている限り何も恐れる必要がないのですね。

人から誤解を受けたり、陰口を言われても(つまづきの石にはなりませんようにと願いましたが)「体を殺しても、その後それ以上何も出来ない者どもを恐れてはならない。」の御言葉を思い平安をいただいてきました。御言葉には本当に力がありますね。

2月18日(土) ルカ12:22~34 思い悩むな

22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。 23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。 24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。 25 あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。 26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。 27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。 28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。 29 あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。 30 それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。 31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。 32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。 33 自分の持ち物売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。 34 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」31節 2000年前にも人々はこのように日常生活のことで悩んでいたのでしょうか、余りにも今と変わらず驚きます。神さまは本当に気前のよい方ですね。神さまと親しくさせていただいてお従いし続けると、必要なものを全てどころか、喜んで神の国を下さるとあります。皆で神の国を奪い合い(求め合い)そこに心をおいて、恵みを分かち合えたら幸いです。

2月19日(日) ルカ12:13~21 神の前に豊かに

13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」 14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」 15 そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」 16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。 17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思ひ巡らしたが、 18 やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、 19 こう自分に言うてやるのだ。」「さ

あ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』 20しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。 21自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。』

「貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることも出来ないからである。」15節 著名な先生のご著書に「一番困ってしまうのは・・・、お金ならいくらでも払いますので、どうぞ命を助けてくださいと言われることです。」と書かれていました。患者様の切羽詰まった言葉に、切なさが胸に迫りました。命の源のお方を見失うことがないように日々お守りください。

(担当：渡部 和子)

第47課 ショートメッセージ 「神の前に豊かに」

聖書箇所：ルカ12：13－21

暗唱聖句：神のさまざまな恵みの善い管理者として、

その賜物を生かして互いに仕えなさい。（1ペトロ4：10）

今回の聖書箇所の「愚かな金持ちのたとえ」と、続く「思い悩むな」から地上における富への警告を読んでいきたいと思います。

「愚かな金持ちのたとえ」では、物の豊かさによって神を忘れないようにとの警告がされています。旧約聖書の申命記11章13節から21節において、豊かさ故に神を忘れないように、そして無縁の他の神々に従わないように、もし主の教えに聞き従わず命じた道をそれるようなことがあれば呪いを受けると書かれています。

しかし、ルカ12章13節～21節での群衆の中の一人は、物を得たいという強い思いが先行し、この世での命が絶えた時のことや、イエスの語る「命」の霊的な豊かさを知る由もないほどに多くの物を求めてしまいます。

私たちはどうでしょうか？ 生きがいを見出そうとする時、主に全てをおゆだねしますと祈りつつも、自分勝手な欲求に満たされてはいないでしょうか？ 物質的な欲求と精神的な欲求の両方について、ここでは警告されているのではないかと思います。

20節の「愚かな者」とは「神を忘れた者」であり、詩編14編1節にある「神を知らぬ者は心に言う」と同じ「者」を指し、続いて「神などないと。人びとは腐敗している。忌むべき行いをする。善を行う者はいない。」と既に警告をしています。

そして同じく20節の「今夜、お前の命は取り上げられる。」は、原語では「命を返還するよう要求される。」であり、すなわち、人の命は神からの借り物であることを暗示していると考えられています。

詩編14編1節の警告を逆説的な意味として捉える時、12章21節の「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」の応答は、続く33節にあるように、「貧しい人に自分の持ち物を売り払って与え神に富を積むという行為をすること」であり、神を畏れ悪から離れ、善を行う積極的な行為は、全て神によって祝福されるのです。

神さまからお借りしている私たちの命を、神さまの御心に適う仕方で生き抜き、御国への道へと導いていただけるよう、思い悩むことなくお捧げしていきたいと思われれます。

22節で「イエスは弟子たちに言われた。」とありますが、なぜここで「弟子たちに」なのでしょう？ 内容に触れながら考えていきたいと思います。

23節の「命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。」は一見論理的ではないように思われますが、これは、神さまは命や体に必要な物は全てご存じで、時に応じて全てを備え与えてくださるのであるから、心配する必要はないということだと考えることができます。

24節の「神は、鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。」でのカラスですが、レビ記11章15節、申命記14章14節にもあるように、ユダヤ人にとって不浄な鳥として書かれています。しかし、鳥の中で不浄なカラスでさえ、神さまは養ってくださっているのですから、鳥たちよりも人間は価値がある、と聖書で語ってくださ

っているように、人間は食べ物、衣服のことで思い悩む必要はないのです。

27 節の「野原の花」は、紫色のアネモネを指すと思われ、ソロモンの衣の色が紫色ですので、栄華を極めたソロモンでさえ、この花（紫色のアネモネ）の一つほどにも着飾ってはいなかったと語られ、世の異邦人に倣ってはいけなと、同じように思い悩んではいけないと度重ね言われます。

31 節で「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」と記されています。神さまは、人が生きて行く上で必要な物は全て備えてくださっていることを繰り返し語られ、何よりも大切な「神の国への約束」が準備されていることを表しています。

32 節の「小さな群れ」とは、子ども、病人、貧しい者、旧約でのエジプトの奴隷・・・を指すと思われ、そのような者たちこそ、神は喜んで神の国へと導いてくださるのです。

22 節の「弟子たちに」は、現在、教会に集う私たちであると考えることが出来ると思います。並行箇所であるマタイ 6 章 34 節には「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」と記されています。また、箴言 2 章に「わたしの言葉を受入れ、戒めを大切に知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら分別に呼びかけ、英知に向かって声をあげるなら銀を求めるようにそれを尋ね、宝物を求めるようにそれを探すならあなたは主を畏れることを悟り、神を知ることによって到達するであろう。知恵を授けるのは主。主の口は知識と英知を与える。主は正しい人のために力を、完全な道を歩く人のために盾を備えて裁きの道を守り、主の慈しみに生きる人の道を守ってくださる。」とあります。

私たちが心から御国を求める時は、神さまの主権に献身を持って従いたいと思います。その時、神さまは必要な物を全て満たして下さり、愛して下さり、慈しんで下さるでしょう。

最後に「絵伝イエス・キリスト」で荒井献先生が書かれている文章で終わります。

イエスは「神の国」が、「神の支配」としてすでにこの世のなかに実現されつつあると、マルコ 11 章 5 節、ルカ 17 章 21 節で告知した。イエスにとって重要なのは、人間が自分の民族的・社会的・性的・倫理的有能さに価値をおき、自己中心的に他人の価値を判断しようとする態度を放棄し、神信仰によってむしろ自己を相対化して、自らあえて民族的・社会的・性的・倫理的に「弱い者」の位置に立つことであった。人がもしこのような意味において「弱者」の位置に立つことを決意するならば、そこに「神の国」は実現されつつある、とイエスはみたのである。（マタイ 11 章 2 節～19 節、ルカ 7 章 18 節～35 節）

● 分かち合い

- ・「神の国を求める」という言葉から、どんなことを連想しますか？

(担当：岩崎 秀子)

第48課 準備のための聖書日課

2月20日(月) ルカ4:16~21 イザヤの言葉とイエス

16 イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおりに安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。

18 「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、

圧迫されている人を自由にし、
19 主の恵みの年を告げるためである。」

20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

イエスさまは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた時、何を思ったことでしょうか。
神さまの愛と、これから自分が行うべき事への決意かもしれません。
イエスさまを遣わされてくださいました神さま。感謝いたします。

2月21日(火) ルカ5:27~32 わたしが来たのは

27 その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。28 彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。29 そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席に着いていた。30 ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」31 イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

イエスさまは日の当たらない道を歩かれて、罪びとと称される人々に、温かいまなざしをそそがれているのです。

2月22日(水) ルカ8:42b~48 イエスの服に触れた女

イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。43 ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。44 この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。45 イエスは、「わたしに触

れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。46しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。47女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。48イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。イエスさまはほほえんで言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」イエスさまは希望と喜びをお与えになります。

2月23日(木) ルカ19：1～10 見いだされたザアカイ

1 イエスはエリコに入り、町を通っておられた。2そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。3イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見るができなかった。4それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。5イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」6ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」8しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」9イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。10人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

人に施しをする。困っている人の為に働く。神さまはその行いをする人に喜びを与えてくださいます。でも、その行いをしようとする時、人の目を気にしたり、損得を考えたりして、ためらいが生じてしまうのです。ザアカイのようにはっきりと口に出してできるようになりたいです。

2月24日(金) 使徒言行録13：44～52 異邦人たちへ

44次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。45しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。46そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者になっている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。47主はわたしたちにこう命じておられるからです。

『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、
あなたが、地の果てにまでも
救いをもたらすために。』

48異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。49こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。50ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、

その地方から二人を追い出した。 51 それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。 52 他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした」

人は正しいと信じると頑なになります。反対者を排除しようともします。でも、そんなあなたがたもいつか、きっとわかってくれるときがくる…。それを願って…。私は異邦人の方へ行きます。

2月25日(土) ルカ15：18～24 待ち続ける父

18 ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。 19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』 20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。 21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』 22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。 23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。 24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

息子は父親から授かった財産を全て使い果たし、その日の食べる物にも困る状況になりました。自分の愚かさを思い、「もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」父親のところに行き言おう。父親は遠くに来た息子に走り寄り、抱きしめ、接吻しました。死んでいた息子が生き返り、戻ってきてくれた。祝おう」そして祝宴を始めました。
何よりの喜びですね。私たちも生まれ変わった日、バプテスマの日をお祝いしましょう。

2月26日(日) ルカ15：1～10 見つけたすまで

1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。 2 すると、ファリサイ派の人々と律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。 3 そこで、イエスは次のたとえを話された。 4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。 5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、 6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。 7 言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

「無くした銀貨」のたとえ

8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。 9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。 10 言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びが

ある。」

聖書箇所とは関係ありませんが、同じような私事があります。

それは、私にとってとても大切な時計でした。いつも、いつも左腕にありました。体の一部です。以前ですが、会社に着いて見ると、時計がない事に気がつきました。どこでなくしたのだろう。私は不安と絶望で一杯になりました。帰りに東上線の駅で落し物部署に聞いてもらいました。時計の届け出はないとの事でした。あきらめの気持ちで上板橋駅前の交番に聞きました。「時計の落し物はありませんか」「届いていますよ」「えっ！」目の前が明るくなりました。小学生の児童が線路沿いの道で拾って、交番に届けてくれていました。今、板橋警察署にあるとの事。次の日、半日休暇をとって、板橋警察署に行きました。時計はありました。私の腕にまた戻りました。神さまとその児童にありがとうございますと感謝をしました。お菓子の詰め合わせを持って、その児童の家にお礼に行きました。その児童の名前を「夢乃助」君と言います。私は「夢乃助」君を生涯忘れることはありません。

私事で失礼致しました。

「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

おめでとうございます。バプテスマをうけるあなたは、私たち教会員、全員の喜びです。

(担当：小沢 敬一)

第48課 ショートメッセージ「見つけだすまで」

聖書箇所：ルカ15：1－10

暗唱聖句：一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。

(ルカ15：10)

ルカによる福音書の15章には、なくしたものを見つけて喜ぶ3つのたとえ話が書かれています。「迷い出た羊」「なくした銀貨の話」「放蕩息子の話」です。大切なものをなくした悲しさ、そして、それを見つげ出した時、取り戻した時の喜びが描かれています。「羊」「銀貨」「息子」は、すべて私たちで、見つけ出してくださるのは神さまです。

イエスさまがなぜこのようなたとえ話をなさったかという、徴税人や罪びとたちと食事をなさるイエスさまを見て、ファリサイ派の人々が不平を言ったからです。徴税人というのは、イスラエル人でありながら、イスラエルを支配するローマ帝国に雇われて、イスラエルの人々から税金を集める仕事をしていました。しかも、必要な額以上に集めて、余った分を自分の懐に入れていたので、イスラエルの人々からは、裏切り者として嫌われていました。罪人の代表とされていたのです。

一方、ファリサイ派の人々は、律法を固く守り、それを他の人々にも守るように強要し、守らない人たちは罪人、神に愛される資格のない人に見下していました。

それで、徴税人たちと食事をとるイエスさまを見て、ファリサイ派の人々は、汚らわしいと文句を言ったのです。

しかし、本当の罪人は、神さま中心ではなく、自分中心になってしまう人のことです。神さまを愛するよりも自分を愛し、神さまのために働くよりも、自分の利益を考えて動いてしまう人のことです。つまり、私たち人間は、みな罪人なのです。

このような罪人の私たちを、神さまは愛してくださいます。

神さまから離れて、迷い出た、いなくなった私たちを、神さまは決してあきらめることなく、捜し出してくださるお方なのです。

私たちが物をなくしてしまったとき、どのように感じるでしょうか？それほど思い入れのない物、たくさん持っている物、ちょうど買い替えようと思っていた物などであれば、何とも思わないかもしれません。しかし、とても大切にしていた物、思い出のある物、この世に一つしかない物であれば、どれほど落胆し、悲しくなるでしょうか？

神さまにとって、私たちは、この世に一つしかない、とても大切なものなのです。たくさんいる中の一人ではないのです。

迷い出た羊は、帰る道がわからないので、自分の力では帰ることができません。そのままでは狼に食べられてしまいます。心細くなっても鳴いていても、周りには誰もいません。銀貨も、もちろん、自分で戻ってくることはできません。それどころか、そもそも、自分からいなくなったのではなく、手から滑ったり、荷物から落ちたりして、暗く日の当たらない、誰の目も届かないような隅に転がってしまったのです。どちらも神さまに見つけ出していただくしかないのです。

迷い出た羊を見つけた羊飼いは、羊を肩に担いで帰ります。神さまから離れて、死んだも同然になっていた私たちを見つけたイエスさまは、「もう大丈夫。安心なさい」と私たちを担いで帰ってくださるのです。私たちは、安心して、イエスさまにこの身を預けてよいのです。

羊飼いや、銀貨をなくした女は、見つけるととても喜びます。一人で喜ぶだけでなく、近所の人々を呼び集め、一緒に喜んでくださいというのです。さすがにこれはやりすぎでは？と思いますが、「罪人が悔い改める」というのは、これほどの大きな喜びなのです。

「悔い改める」というと、自分で反省して、心を入れ替えるように思いますが、今日の聖書箇所からもわかるように、私たちが自分で悔い改めるのではなく、神さまに悔い改めさせていただく…神さまに捜していただき、見つけられ、連れ戻していただくのです。神さまに出会って、死んだようになっていた私たちは主に立ち返り、生かされるのです。

● 分かち合い

- ・ 迷い出た自分を神さまが見つけ出してくださったと感じたことはありますか？
- ・ 神さまの目に高価で尊い存在であるのに、罪人、価値のないもの、いなくなっても困らないものとして見失われている人、真っ暗な中で、危険が迫る中で、捜し出してほしいと願っている人が、私たちのすぐそばにもいるのではないのでしょうか？

(担当：田中由記子)



2023.2 成人科